

平成17年(ワ)第87号・同18年(ワ)第16号 遺伝子組換えイネ野外実験栽培
差止め等請求事件

原告 山田 稔 ほか22名

被告(独)農業・食品産業技術総合研究機構

証拠説明書(4)

2006年7月11日

新潟地方裁判所高田支部民事部 御中

原告ら訴訟代理人弁護士 柳原 敏夫

書証(甲71~73)

号証	標目 (原本・写しの別)	作成 年月日	作成者	立証趣旨
71	意見書(2)	原	2006.7.10 東京大学海洋 研究所 教授 木暮 一啓	<p>・ 本件のディフェンシン耐性菌の諸問題を考える上で、抗生物質耐性菌の歴史から学ぶべき重要な教訓の一つとしてバンコマイシン耐性菌の問題があること。</p> <p>・ ディフェンシン耐性菌発生の蓋然性について、被告が「低い」と主張する根拠と思われる Zasloff の論文は、その後、同じ Zasloff らの共同論文によって完全に否定されたこと。</p> <p>・ ディフェンシン耐性菌発生のメカニズムについて、被告より提出された高木意見書(乙20)の「ディフェンシン耐性菌は突然変異によってのみ生じ、他の耐性菌の耐性遺伝子からの伝達によっては生じない」という見解は、近時明らかにされつつある科学的知見とは相容れないものであること。</p> <p>・ 本実験により危惧される耐性菌のヒト等への危険について、水田に無数に存在し、今日「世界中の病院内で最も重要な感染症となっている」緑膿菌という具体的な菌に即して検討したこと。</p>

7 2	Nature News オンライン版 (翻訳文添付)	写	2005.11.2	シャーロット シューベルト	<p>木暮意見書(甲71)に紹介されているZasloff氏の自説変更に関する記事である。細菌が抗菌蛋白質(抗菌ペプチド)に耐性をもちうるということが実験で証明され、被告職員が「ディフェンシンには耐性菌が発生しにくい」と考えるよすがにしたZasloff氏が既に自説を変更し、「もし何かが試験管の中で起こるなら、それは実際の世界でも起こるでしょう」と述べていることが記載されている。</p> <p>また、アイオワ大学の微生物学者であるBrogden教授が、「抗菌剤耐性が出現したら、私たちの防御システムの大部分を攻撃にさらすことになる」「もし、そういう細菌が広まったら、ちょっとした切り傷や擦り傷も治らなくなるでしょう」と述べていることが記載されている。</p>
7 3	育種学研究8(別 1)・2006 の230P	写	2006年	被告職員	<p>被告職員により、本GMイネの栽培実験結果が、5系統のイネについて報告されている。</p> <p>このうち、黒田氏が実験で用いたAD77系統は、非組換えイネとの比較において、葉いもち病に対しては罹患率を4分の1減に、白葉枯れ病菌に対しては変化なしとの結果にとどまったことが報告されている。</p>

以上